

会員数(54・8月現在)

逗子地区 125名

葉山地区 198名

大船地区 60名

合計 383名

吟道月報

認 可 日 本 詩 吟 学 院 岳 風 会

神 奈 川 碩 心 会 発 行

54年8月

第85号

発 行 者

根 岸 岳 萃

編 集 風

中 村 愛 風

秋 元 梁

想 出 の 詩

堀内支部A組 加藤 穂 風

思い出とは大東亜戦争中、信州小諸に疎開していた。昭和十九年の秋から二十年八月末迄の僅か一年足らずであったが、その間北佐久の高原々名所古跡を四季を通じて満喫できた事は戦争といういやな思い出の中のすくわれる思い出であった。

宿舎はちよつど古城の真下であり、前方には豊かな水が湛えた千曲川を望む風光明媚な所であった。その宿舎を毎朝七時に出て軍事工場に通うのであったが、山鳥が鳴く林道を、時にはリスが木々にとびかう様をみながら、登り切った右に折れた所が懐古園の門前で、のすく脇に島崎藤村の小諸なる古

城のほとり雲白く遊び必悲しむの碑が立っていていつとはなれに頭の中に刻みこまれていった。そして門前を小海線に沿って十五分程行くと工場に着く、そこで朝礼後女子挺身隊とは別に四五名の男子は隊列を作り古城の本九跡で夕方まで軍事教練に励んだものだった。又浅間路を追分々軽井沢まで度々強行軍を行ったものだった。

しかレやがて八月十五日終戦の時がきた、勝利の日までと頑張ってきた我々若者は、海行かば水漬く屍の言葉につづく玉言放送に其の場に泣き伏した。そして八月末荷物を整理して小諸と別れる時がきた、その前夜蜀り酒での送別があり、翌朝挺身隊の

人運の見送りの中を汽笛一声汽車は一路上野へと向ったのであった。

暮れゆけば浅間もみえず歌悲し佐久の草笛、藤村の詩は小諸時代の思ひ出と共にいつまでも忘れられない思ひ出の詩である。

◆秋季査定のお知らせ……許証部

と き：九月九日(日) 午前十時より

と ころ：兼山町福祉会館

(山手廻りバス三崎行長井行兼山小学校前下車)

- 三ヶ所にて十時に同時スタートしますので各自の受付票により番号確認 おくれぬ様
 - 受付票に住所、氏名、年令、雅号、希望吟題を記入の事(初伝、中伝、奥伝を受けられる方は希望する雅号を記入の事)
 - 審査料(四百円)は支部毎にまとめ、当日までに許証部(中村)まで。
 - 許証料(54年2月号に記載)も同じく9月25日迄に
 - 当日審査料が終ったあとの会場整理を次の方にお願ひしたいと思ひます……高梨閑山
- 沼田真山、綱川哲泉、村田絃山

高梨閑山さん

今月は堀内支部D組の高梨閑山さんを紹介してみよう。

小柄で軽々しい物腰に七十八才という年令を聞くと思わず元気でスネーといいたくなる。和の査定には奥伝を受けられるが出席率は100%に近く雨の日も風の日も夜の道を自転車に通ってこられる。吟じはじめると額から玉の汗が流れる程精いっぱい吟じ、音感よし、節調よし。

電報電話局長を退職、以来兼山送管委員、納税組合長、森戸神社会計等、そして本職の保険業も自転車を使使して精力的に動いていられる。

楽しい席には得意の懐メロが流れ、若き日の閑山氏が思い浮かぶ。閑山氏の年までまだ二十五年程、果してあの元気でいられるかというたら、先生なら大丈夫と太鼓判を押された。もう一つの趣味である俳句を披露して

沈丁花 護郁として老住めり……閑山

(愛風)

伝号の不動文字について

許証部長

中村幸風

毎週教場における稽古を積重ね、規定の出席率を吟伎に一步前進が認められると審査の資格が与えられ、合格すると上位の許証を認許される事は皆様御存知の事ですが、初伝に泉、中伝に山、奥伝に風、皆伝に〇岳、総伝に岳〇、という不動文字の配列について御案内したいと思ひます。

これは祖宗範木村岳風先生が擬されたものですが、単に好きな文字を配列したのではなく、大自然の生きた姿、生成発展の生命の修練の課程をとりいれて、無言の中に心構えの感化を秘めたところ、まさに人智を絶するものがあります。

その自然現象については、理事長の渡辺岳神先生が次の様に岳風伝の巻頭において説明されていますので次に転載し説明にかえます。先ず初伝を地下水が泉になって湧き出するところにそれを見立て、生命の現象の根源か

ら修道の歩を進める、一步一步高きを求め、且つ登って次才に下界を離れた所を中伝に見立て山に到る、山も登るにつれて眼界はいよいよ開け、一眺千里、山風起り、鞋底より雲を払う、まさにこの時風カゼに浴する晴天地の、境の感を覚ゆる、これを奥伝の境地に見立てる、吟道の修業も全くこれと同じである、更に歩を進むにつれて、いよいよ高く険しい難路多く岩石岩となつて草木又稀となる、山岳の性質を帯びる頃、来る者又まことに少い、下位岳即ち皆伝と及びここに充許する、これらの経験を通りすぎ、更に精進と努力をつづけ常に後進の範をたれる者に上位岳としてこれを総伝と見立て宗進せしむ。

この頃漸く山も嶺に近く、白雲去来し、万年雪を載くその崇高なること、ものに例えようもない、吟道に於ける地位も又之を意味し理想としてゐる。

再近入会された方も多いので51年7月号
月報より再掲載しました。

◎ 吟道月報創刊滿七周年

当吟道月報が47年8月に発行されて七周年を迎えました。号をさかのぼってめぐってみると、当時の会長であり総務でもいられた三井先生の編集の御苦労のあとが偲ばれると同時にすばらしい内容に頭の下がる思いです。主な経過と記事を辿ってみると

47年8月1日才一号発行

47年9月5日49年11月号に碩心会の歩みを三井元会長が連載

49年2月5日49年11月号に支部の歩みを当時の各支部長が連載

49年1月号に才一回吟道夜話、二回目から^{50年}2月5日11月号に三井元会長が連載

51年3月号に会長辞任の挨拶、そのあとを加藤冽風(圭岳)先生が編集ひきつぐ。

53年5月号より中村、秋元のコンビで編集、現在に到る。

④ 47年4月5日48年4月まで堀内支部便りが発

行されていきます。

尚発行当時から52年1月号迄の長い間建設支部の山本青山さんの並々ならぬ御協力があった事を紙上を借り心から御礼を申し上げます。と思います。

これからも一人でも多くの人に読んでいただける月報をモットーにつづけたいと思います。

~~~~~  
(支部長変更)

(建設支部) 糸形幸山さん退会に付田中明泉さん支部長に

(住所変更)

(沼間支部) 松井玲山 返子市沼間五丁七八〇一十三

(毛) 〇四六八一七三二六八八二

(入) △△

(大船支部) 再大川翠山 鎌倉市大船一三三三三十九

(毛) 〇四六七一四六一五九五九

(堀内支部) 佐藤勝代 川崎市東田町一六

〇四四一三二一四〇六七

(退) △△

240 三橋映山(下山)